

白秋アートギャラリー (3)

母乳の味

山田 恵里

初孫が生まれて、久しぶりに赤ちゃんが身近な存在になった。ほぼ四半世紀ぶりに道を歩いてもテレビを見ても活字を読んでも、赤ちゃんと関係の物が目に飛び込んでくる。白秋の詩歌を読んでも、乳児目線であつた詩「母〔思ひ出〕増訂新版所収」に目が引きつけられた。

母

母の乳は枇杷より温く、／柚子より甘し。

唇つけて我が吸へば／擦ゆし、痒ゆし、味よし。

片手もて乳房押し、／もてあそび、頬を寄すれ。

肌さはりやはらかに／抱かれて日も足らず。

いとほしと、これをこそ／いふものか、ただ恋し。

母の乳を吸ふごとに／わがこころすずろぎぬ。

母はわが凡て。

母乳が赤ちゃんととってどんな味なのか、大人にはわからない。ほの甘く優しい味というほんやりしたイメージがあるだけだ。だからこそ、「枇杷より温く、柚子より甘

し」という思いがけない表現に目が留まった。冷たい果物である枇杷、酸っぱい柚子と母乳は結びつかないように思われる。しかし枇杷は、その柔らかく膨らんだ形状と暖かい色が乳房を連想させる。そして熱くもなくはつきりした味でもない母乳は、ほんやりした枇杷よりも、ほのかに温かいに違いない。爽やかな酸味のある柚子よりも、ほのかに甘いに違いない。逆のイメージを持ち出すことで、かえってその味のほのかな優しさが引き立つようだ。白秋ならではの、絶妙な比喩表現である。

赤ちゃんは母乳を飲んでお腹を満たすだけでなく、乳房の「やはらか」な感触も味わっているらしい。その時赤ちゃんとってこれ以上の幸せはない。赤い鳥運動に関わり、子どもの気持ちに寄り添ってきた白秋が、赤ちゃんの代弁者として母親に寄り添ってくれているように思う。

乳房は赤ちゃんと母親をつなぐ。娘の里帰りの間、母乳のもとになる食事に気を遣い、乳腺炎になればじゃがいも湿布で乳房の手当てをした。祖母になった私には、出産も授乳も、もうはるかに遠い思い出だ。しかし新米ママである娘に「こんなに大変なことを三回も乗り越えたなんて、お母さんってすごいね」と言われて、まんざらでもない。「もつと褒めてもいいよ」とそっくり返って倒れそうな今日この頃である。